

熊本大学教育学部附属 教育実践総合センターニュース

No. 35 2010.8.1

ホームページ <http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~jissen/index.htm>



教育実習事後指導（教育実践総合センター）

情報通信社会と教育の光と影について	社会科	山中 守	2
ものづくり教育と教育実践総合センター	技術教育	田口浩継	3
運営委員・新任のご挨拶	保健体育科	錦井利臣	3
実践センターの運営委員の一員となって感じたこと	特別別科	入谷仁士	4
附属学校としてできること	附属小学校	濱本 竜一郎	5
教育実践総合センター運営委員になって	附属中学校	池田 今朝清	6
熊大式授業づくりシステム	附属特別支援学校	中山龍也	7
センター日誌			7
編集後記	センター長	吉田 道雄	8

情報通信社会と教育の光と影について

教育学部社会科教育 山中 守

情報通信社会の光と影，これは研究テーマの一つですが，新たな教育の必要性を感じています．数年前から熊本県PTA連合会で取り組まれている有害情報に関する委員会のメンバーをしています．この取り組みはPTAの方々のご努力によるもので，文科省からも先進的な取り組みとして評価されている取り組みです．日々，ICTの技術進歩とともに，ますます深刻化している有害情報の問題に対して，対策が後手にまわってしまっています．

まず私ができることから調べてみようと思ひ，今年の2月に熊大教育学部のある学科2～4年生70人にアンケート調査を実施しました．この調査結果の概要を説明しながら考えてみたいと思います．

携帯電話をはじめて所有した学年は，中1が4.3%，中2が8.6%，中3が14.3%と倍々に増加し，高1ではじめて所有した学生は58.6%と一挙に増えています．累積比率でみると，中3で27.2%が所有し，高1で85.7%，大学で100%所有でした．この増加にともなって被害を受けていた学生は急増していました．例えば，架空請求を受けたことがある57.1%，有害サイト40.0%，誹謗中傷2.9%などです．もはや携帯電話は若者にとっては必需品であり，携帯電話の所有の是非よりも被害の実態を踏まえた

教育が大切を思います．

携帯電話の所有のきっかけは，周りの友達がもっていたのでという理由が一番多くて41.4%，つぎは家族との連絡のため(28.6%)，友人との連絡のため(24.3%)などです．

はじめて被害を受けた学年をみると，中2で2.9%，中3で5.7%，高1になると32.9%と急増しています．所有率の増加にともなって被害も増えますが，中学生で携帯電話を所有した者の約32%が被害を受けていました．大学生までに被害を受けた学生は71.5%に達しています．特に危険と感じたのは，中学生が興味本位で，友人との連絡というごく普通の理由で所有した場合に被害に会う確率が高くなっていました．

このような現状から考えますと，社会問題に対する認識がまだ不十分な若者に，手軽で便利な携帯電話の脅威が襲いかかっている危険な実態が浮かんできます．有害情報の問題は単なる携帯電話の問題ではなく，底辺を広くした教育問題として取り組むことが必要だと思いますがいかがでしょうか．なお，ここで用いた数値は調査対象者を限定した場合ですので誤解のないようにしてください．

ものづくり教育と教育実践総合センター

教育学部技術教育 田口浩継

本年度4月より、教育実践総合センター運営委員として活動にあたることになりました。教育実践総合センターの活動内容はフレンドシップ、ユア・フレンド、インターンシップ事業、教員免許更新講習など、学生、現場の先生をはじめ地域の方々に関するものまで多岐にわたっています。技術教育の研究・教育・社会貢献と教育実践総合センターの活動を考えますと、ユア・フレンド事業に関する不登校児童・生徒へのものづくり教育としての関わりや、協力校との連携で黒髪小学校・クラブ活動でのものづくり活動、桜山中学校でのロボット・制御教育などがあります。これらの活動は、学会や研究大会で紹介するとともに、教育実践総合センターの紀要で報告させてい

ただきました。今年度は、熊本市で行われている適応指導教室に美術教育や技術教育の教員・学生とユア・フレンドの学生と連携して活動を深めていきたいと思っております。また、教員免許更新講習でも、ものづくり教育や情報教育、環境教育について現場の先生に改めてその意義や教育効果について考えていただく良い機会をいただくことができました。

これらの企画・運営には、教育実践総合センターのサポートがあっはじめて可能といえます。センターの機能がさらに充実するよう、運営委員の先生と一緒に私自身も何らかのお役に立てるようになっております。どうぞよろしくお願い致します。

運営委員・新任のご挨拶

教育学部保健体育科 錦井利臣

新任のご挨拶をさせていただきます。

日ごろより実践センターの運営につきましては、生涯スポーツ福祉課程の木村正治先生がセンター長ということもあり「ユア・フレンド事業」「フレンドシップ事業」「インターンシップ事業」「教員免許状更

新講習」「教育実践研究紀要の発行」などの業務を展開されていることを身近な存在と感じており、随時、協力できる体制でございました。ところが、昨年末、木村先生の急逝により、私どもは深い悲しみに包まれてしまいました。これまでに保健体育科

としてもお導きいただきつつ、多大なご尽力をいただいておりますだけに本当に残念でなりません。

そのような折、22・23年度の実技系運営委員会委員をお受けいたしましたので、微力ながらセンターの運営に貢献できればと存じます。25・6年前にセンターから、Sony社製「ビデオ動作解析用特別機器」を保健体育科に移管してもらったことがありました。ビデオ映像10秒間を取り込み、1/100秒で画像表示できるもので、当時の個人研究費ではとても購入できる物ではありませんでした。3年ほど使用させてい

たきましたが、映像の乱れや充電が出来なくなり、修理しようにも特器の為、メーカーにも部品もなく、ついには廃棄処分にさせていただきました。当時の教育・研究に役立たせていただいたことを思い出します。当時では先進的なそれもあまり一般では使用しないような機器をセンターに導入されていたことに、感謝いたします。

センターの機能の充実と学部との効果的な連携のため、意見交換しながら、お役に立てればと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

実践センターの運営委員の一員となって 感じたこと

養護教諭特別別科 入谷仁士

教育実践センターが実施していることとして、「教員インターンシップ事業」「4年次教育実習事後指導」「ユア・フレンド事業」などを思い浮かべることができます。

しかしながら、このような実践センターの事業の果たす重要性について、わかっているつもりでも、「じっくり考える機会」を持つことはこれまでなかったように思います。

今年度より、運営委員をさせていただくことになって、このような教育実践センターの行う様々な取り組みが、どのような役割を担っているのかを自分なりに少し考えてみることにしました。

例えば、「教員インターンシップ事業」

では、子どもたちとの触れ合いを通じて、子どもに内在する多様な可能性等を感じたりする中で、「子ども観」をさらに深めたりすることができると考えられます。また、教師の役割とそれらを果たすために必要とされることは何であるかを感じ、学び取ることにもつながると考えられます。このような経験は、「教師になりたい」といった意欲や教師資質の獲得に大いに役立つものであると思われま

す。また、「教育実習事後指導」では、新たな視点から自身の実習を捉えなおしたり、客観的に実習での実践を振り返ったりすることなどが可能になると考えられます。さらに、改めて実習で触れた子どもの表情や

態度等を思い返し、「子ども観」を深めていくことにつながっていくと考えられます。そして、教師となっていくには、どのようなことを改めて学ばなければならないのかを、再認識していくことができると思われます。このような事後指導の機会が、教育実習をより学びの多いものとしていると思われます。

今回このように実践センターの事業の役割を、改めて自分なり考えてみて、その重要性を再認識することができました。同時に、微力ながら運営委員として一員として、このようなセンターの事業を有効に活用できるように、その取り組みを支えていければと、考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

附属学校としてできること

附属小学校 教頭 濱本 竜一郎

本年4月に附属小学校の教頭として赴任し、そして、教育実践センターの運営委員となりました。

教育実践センターは、教育研究部門として、「教育臨床部門」「教育課程部門」を設置されています。そして、教育実習事後指導・フレンドシップ事業・ユアフレンド事業など、学生を対象にした各種の教育的事業を企画・実施されています。さらには、附属学校をはじめとした学校現場との共同研究、各種の助言等も行われています。

運営委員の一人として、こうしたセンターの使命をよく理解し、これらの事業に対して主体的に関わりたいと思っています。

中でも、本校は附属学校として教育実習を担当しています。教職を目指す熱い思いをもった学生が、実際に子どもたちとの授業を通して学んでいます。

かつて、本校のPTA広報誌「ふたば」に、「附属小の先生方は、どうして教師に

なりたと思ったのですか？」に教官が答えるといった特集記事がありました。多くの教官が「教育実習で子どもたちとの出会いに感動して・・・。」と書いてありました。それまで何となく教師を目指していた若者を本気にさせる教育実習だったのでしよう。これほど、子どもたちとの出会い、そして、実際に授業を進めることの難しさや、子どもたちが「わかった」「できた」と言ってくれたときの感動は大きなものなのでしょう。

この間も、大学から百五十四名の三年生が挙央幾実習に訪れていました。日に日に教師の顔に、社会人の顔になっていく様子を見てとてもうれしくなりました。運営委員の一人として、センターと連携を密にししながら、こうした事業を充実させていきたいと思ひます。

教育実践総合センター運営委員になって

附属中学校 教頭 池田 今朝清

本年度から2度目の附属中学校勤務になり、教育実践総合センター運営委員として関わらせていただくことになりました。以前は、熊本市内の中学校に勤務していましたので、実践センターが取り組んでいる事業に大変お世話になっていました。

その一つに、ユアフレンド事業があります。熊本大学教育学部と熊本市教育委員会の連携で、現役の学生が、不登校傾向の児童・生徒の相談相手となり、家庭や学校、その他の施設等を利用して個別に関わるというものです。不登校傾向の児童・生徒本人はもちろん、保護者にとっても、何とか学校へ気持ちが向かうようになりたい（なって欲しい）という思いや願いがあります。そこで、ユアフレンド事業で知り合った大学生との交流をとおして心のケアをしたり、学力の向上を図ったりしながら、徐々に学校への登校意欲を高めることにつながっています。

小中学校の中には、不登校傾向の児童・生徒数の増加で学校全体としての対応に苦労しているところもあると聞いています。この事業のように、小中学校の教師を目指す大学生が、学生という時期に不登校傾向の児童・生徒と深く関わる経験をするには、その後実際に現場に立った時に大いに役立つものだと思います。

もう一つは、インターシップ事業です。昨年度、前任校に教育実習で来た学生の中の1人が、その後、インターンシップとして、二学期からも学校に来て、授業以外の様々な教育活動に参加していました。教育実習は、期間も短く教科指導中心ですが、インターンシップで来た時には、教科指導はT2の役割や個別指導、授業観察が主で、むしろ生徒理解や学級経営、学校組織の理解等が中心になっていました。

教師として、教科指導の力をつけることは当然ですが実際の教育現場は、それ以外の仕事内容もたくさんあるので、それらのことを知るだけでなく経験しておくことは、少なくとも教育現場に立つ初年度の負担を軽くすることにつながるものだと思います。

さて、それらの事業を推進している教育実践総合センターの運営委員として私ができることは、教育現場の情報の提供であり、幼・小・中・特別支援学校と教育学部との連携がスムーズにできるように働きかけることだと考えています。

本年度、短い期間ではありますが精一杯頑張りたいと思います。よろしく願いいたします。

熊大式授業づくりシステム

附属特別支援学校 教頭 中山 龍也

本校では、「熊大らしく、熊大ならではの」を標榜し、日本でトップクラスの特別支援教育を目指して教育・実践に取り組んでいます。教育研究における先導的役割遂行、地域における特別支援教育のセンター的機能の発揮、教員養成という3つの柱を軸に教育委員会をはじめ、地域とのネットワーク構築を図っています。特に、発達障害児への支援や各学校における特別支援教育推進のための支援など、昨年度は70件を超える訪問支援を行っています。特別支援教育の対象となる児童生徒が急激に増加するにもかかわらず、教育に携わる専門家の数は不足し、支援学校へのニーズはますます高まっていますが、限られたスタッフでの限界も感じています。実践センターを軸とし、学

部や附属学校がともに連携しながら地域支援を進めることも今後の附属学校として必要なことと思います。

本校では、今年度から2年間、文部科学省特別支援教育総合推進事業指定校として教育課程に関して、コミュニケーションに視点をあてながら、学校研究テーマである「熊大式授業づくり」と関連させながら実践研究の成果を公表します。附属特別支援学校の「未来を」「夢を」語り合いながら研究活動に取り組んでいます。チャレンジ&アピールをモットーに広く研究の成果を公表し、評価を得ることで熊大の附属学校として、存在を確かなものにしていきたいと思っています。

ご指導、ご助言をよろしく願います。

センター日誌

平成21年度

3月29日 第70回運営委員会

平成22年度

4月10日 ユア・フレンド事業説明会

(教育学部)

4月12日 教員免許状更新講習実施委員

会 (教育学部)

5月8日	ユア・フレンド事業研修会 (教育学部)	高原) ~13日まで
5月10日	第71回運営委員会	6月19日 4年次教育実習事後指導 (20日まで)
5月12日	市教委連携推進委員会	6月26日 4年次教育実習事後指導
5月13日	ユア・フレンド事業研修会 補講 (教育学部)	7月3日 4年次教育実習事後指導 (27日まで)
6月10日	公開講座リーダーシップ・ トレーニング熊本会場(11日まで)	補講 (教育学部) 7月11日 免許更新講習 (中山)
6月12日	免許更新講習 (吉田・中山・	7月25日 免許更新講習 (田中)

編集後記

センターニュース第 35 号をお届けします。本号は新たに運営委員にご就任の先生方からご投稿いただいた。センターも 1979 年の設置から 30 年を越え、建物の老朽化は否めないが、これまでどおりいつも新しい気持ちで前進している。▼センターの活動も時代とともに充実してきた。熊本市教育委員会と教育学部が連携するユアフレンド事業も、その窓口はセンターである。すでに 8 年目を迎えた。また、子どもたちとの触れあいを基本的な目的にして、公民館での活動を企画・運営するフレンドシップ事業も 13 年目、しっかり定着している。このほか、やはり熊本市教育委員会との連携によるインターンシップ事業もある。大学と学校、そして地域社会をリンクするというセンターの目標は十分に達成できていると自負している。▼また教員免許状更新講習の実施に当たっても、センターはそれなりの役割を果たしている。専任教員 3 名と特任教授は講習の担当だけでなく、その運営にも積極的に関わっている。▼ご多分に漏れず、予算は厳しくなる一方だが、そのマイナスの分は "ヒューマン・パワー" でカバーしていきたいと思う。(文責：吉田道雄)

熊本大学教育学部附属教育実践センターニュース

(題字 森山秀吉元教育学部教授)

No. 34 2010.3.26

〒 860-0081 熊本市京町本丁 5-12 Tel 096-325-3282 Fax 096-352-3468